

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

全長約 17 cm。背面は灰褐色で下面は白い。脚は黒い。肩から胸に張り出してくる黒線が、胸の正面でつながっていないのが普通である。飛ぶと翼に白帯が出る。餌はゴミムシ、ゴカイ、クモ、トビムシなど多彩で、砂礫地でも干潟や砂地同様に数十 cm 小走りしてピョコンとお辞儀をするように地面の餌をついばむ。繁殖期はペアでテリトリーを持つが、それ以外の時期は小群で過ごす。留鳥 (対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外では北半球の温帯域に広く繁殖する。国内では北海道から沖縄諸島まで分布し繁殖する。県内では主に天竜川、遠州灘海岸に留鳥として生息し、それ以外の地域での生息記録は少ない。

### 3. 生息環境

海岸砂浜、河口の干潟、大河川の河川敷や中州、埋立地などに生息する。繁殖場所は海岸砂浜では海浜性植物群落の中やその縁辺であり、大河川では河川敷や中州の砂礫地である。浜名湖や海岸線に接した埋立地では草に覆われるまでの数年間利用する。

### 4. 生息状況

繁殖期には遠州灘海岸の砂浜や大河川の中州の砂礫地に営巣するが、さまざまな阻害を受けて繁殖成功率は低い。例えば天竜川において 2004 年には下流側の 4 つの中州に 14 ペアおり、その 12 巣のうち 4 巣で孵化したが、台風によりすべての中州が冠水し、ヒナも卵もすべて流された。その直後繁殖のやり直しは 2 巣のみであった。なお、2017 年に 2004 年と同地域・同期間のチドリ類の繁殖状況を調べたが、本種成鳥は 2 羽のみ、繁殖の兆候は見られなかった (以上北川)。

### 5. 減少の主要因と脅威

主な繁殖場所である海岸の砂浜は痩せ細り (25)、オフロード車による轢き潰しなどのレジャー圧 (71) は高まり、繁殖の成功は稀な状況になった。河川では最大の繁殖数のあった天竜川でも、現在はコアジサシ同様に天敵 (主にハシブトガラス) による卵の捕食 (52-4)、繁殖場所の低水路や中州の植生遷移 (54) による裸地の被覆、冠水による卵とヒナの流失 (55) などの阻害を恒常的に受けている。特に冠水被害は、最近の異常気象で頻度が高まったことが大きな脅威である。

### 6. 保護対策

オフロード車との住み分け。天敵対策。植生遷移や冠水に対する安全な繁殖場所の創出が必要である。

### 7. 特記事項

1973~1985 年に (公財) 日本野鳥の会によって実施されたシギ・チドリ類全国一斉調査結果では、この期間における減少の著しい種として、「営巣環境の保全は急務である」と警鐘を鳴らしていた。県内の繁殖の現況から、ランクアップも検討されている。

### 8. 主な文献

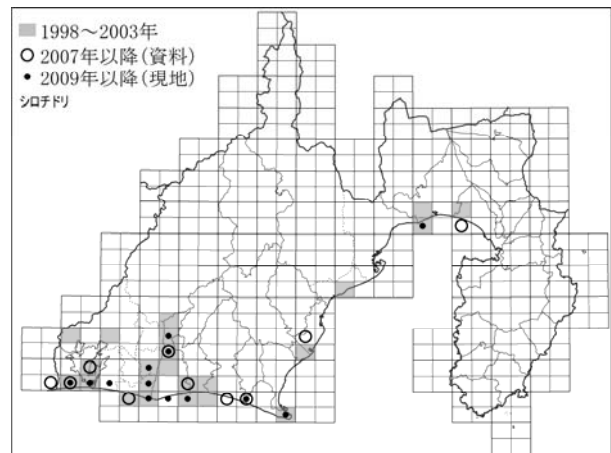
北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(公財) 日本野鳥の会 (1985) 日本野鳥の会全国一斉調査結果報告 I 特筆すべき種の経年変化. Strix, 4: 86

(北川捷康)



天竜川河口 2003年12月5日 北川捷康



# オグロシギ *Limosa limosa* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 40 cm。雌雄ほぼ同色。冬羽は上面が灰褐色で下面は白色である。夏羽は頭から胸が赤褐色で、背は赤褐色と黒白のまだら模様となる。飛翔時には尾の先の黒色部と、白い上尾筒及び翼帯が目立つ。嘴は直線的で長く先端が黒い。脚は黒色で長い。水田、湿地などでミミズや昆虫類などの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の温帯、亜寒帯で繁殖し、南半球の温・熱帯で越冬する。国内では北海道から琉球諸島まで全国で記録されている。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸の内陸湿地での記録が数ヶ所知られる。

## 3. 生息環境

水田や湖沼などの内陸湿地を好み海岸や河口干潟に出ることは少ない。

## 4. 生息状況

1984年には磐田市鮫島で38羽という記録があり、その後の多数渡来として磐田市大池で1989年9月に7羽、1997年10月に3羽といった観察例がある(北川捷康氏私信)ものの、近年の渡来数はきわめて少なく、2011年9月に袋井市浅羽地域、2016年11月に大池でそれぞれ1羽の記録がある。2003年頃には単独から数羽が比較的定期的に渡来していた浅羽地域でも最近ではほとんど見られなくなってしまった。

## 5. 減少の主要因と脅威

圃場整備による水田の乾田化(15-2)及び河川や湖岸の改修(12、13)が挙げられる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊の影響(71)が関わっている可能性もある。

## 6. 保護対策

現在ある内陸湿地の保存と休耕田の有効利用が必要である。袋井市浅羽地域における農作業の一環として、8~10月に水田への水張りにより本種を含むシギ・チドリ類の生息環境が創出されている事実があったが、このような措置はシギ・チドリ類の誘引に効果がある(しかし、水張りの行われた一部の農耕地に多種多数のシギ・チドリ類が集結することで、写真撮影などの車が多数殺到して近隣住民とのトラブルが発生するといった状況が起こり、保護上の新たな問題となっている)。

## 7. 特記事項

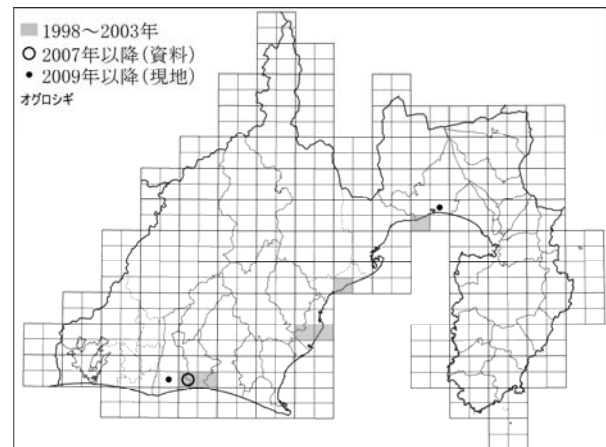
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



磐田市大池 2016年11月8日 中村裕志



(小粥秀治)

# オオソリハシシギ *Limosa lapponica* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード6

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

## 1. 種の解説

全長約40cm。雌雄ほぼ同色。冬羽は上面が黒褐色に灰褐色の羽縁があり、下面は白っぽい。夏羽は頭部から腹部にかけて赤褐色で、背は黒褐色に赤褐色及び白色の羽縁がある。嘴は長くてやや上に反り先端が黒く基部は肉色。脚は黒い。干潟や州でゴカイや小エビ、昆虫などの小動物を採食する。オオソリハシシギ *L. l. baueri* とコシジロオオソリハシシギ *L. l. menzbieri* の2亜種が旅鳥として渡来する。旅鳥(対象:生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸とアラスカの一部の寒帯で繁殖し、南半球の温・熱帯で越冬する。国内では本州以南の各地で記録されている。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸にかけての海岸付近で観察されている。

## 3. 生息環境

主に河口や海岸などの干潟や砂浜に飛来する。内陸湿地に入ることは稀である。

## 4. 生息状況

従来はごく普通に観察された種である。近年になって急速に渡来数を減じ、観察の機会も減少した。シギ類は総体的に減少が目立つが、その中においても特に急激な減少が顕著である。過去の多数渡来としては太田川河口において2001年9月に11羽、2009年4月に7羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。2007年以降では上記太田川河口の他に浮島ヶ原、富士川河口、浜名湖南部などで生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

湿地の埋立て(15-1)や海岸部の埋め立て(14)などの開発行為が、要因として相当の影響を及ぼしているのは事実である。長距離を移動するシギ類にとっては国内外の渡りの通過地域における環境変化(99)が個体数の変動に大きく関わっていることは十分に考えられる。また、状況の把握は困難であるが、温暖化の影響(71)が関わっている可能性もある。それから水鳥全般に関わることではあるが放置された釣り糸が足に絡むといった事故(71)も度々目にするようになって久しい。

## 6. 保護対策

ダイシャクシギやハウロクシギと同様、シギ類のうちでは大型の種類であり、ある程度まとまった面積の干潟の保全(または創出)が求められる。

## 7. 特記事項

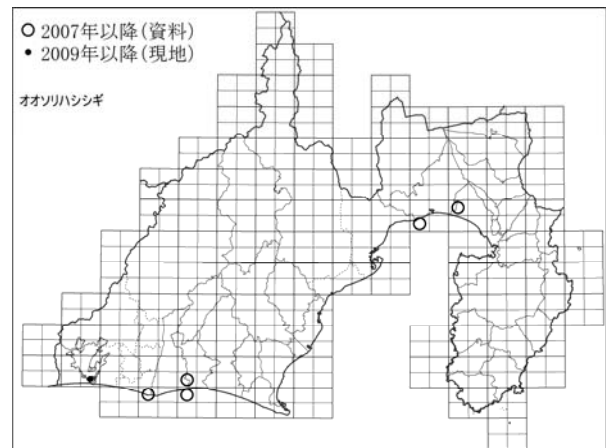
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985)山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



沼津市原 2006年4月9日 渡邊修治



(小粥秀治)

# ダイシャクシギ *Numenius arquata* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 55 cm。上面は淡褐色に暗褐色の縦斑があり、下面は白い。飛翔時には腰及び上尾筒の白色が目立つ。嘴は長く下に湾曲し、黒くて基部は淡紅色。脚は青灰色である。主に干潟や三角州に生息し、1羽から小群でカニや貝類、ゴカイなどの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の温帯から亜寒帯で広く繁殖し、温・熱帯地域で越冬する。国内では全国で記録されているが、北海道から本州北部は旅鳥、本州中部以南では旅鳥及び冬鳥として分布する。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸にかけて海岸付近での記録があるが、渡来数は少ない。浜名湖南部では例年観察されている。

## 3. 生息環境

主として干潟や三角州などの砂泥質の部分に生息するが、海岸に近い水田などに飛来することもある。

## 4. 生息状況

県内では大規模な干潟が生じる場所が少ないこともあり、生息適地はもともと限られていたが、最近では観察の機会が一層減少してきている。1998年4月には太田川河口で3羽、2003年8月に天竜川河口で5羽の観察例がある(北川氏私信)。2009年以降では太田川河口、浜名湖南部、富士川河口で生息が確認されている。昨今飛来するものはほとんど1~2羽である。

## 5. 減少の主要因と脅威

海岸部の埋め立てなどによる水辺環境の悪化(14)、昼夜を問わない釣りの四輪駆動車の往来をはじめ、ウォーターバイクなどレジャー圧の増加(71)による採餌や安息への阻害などが考えられる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における捕獲圧(41)や環境破壊の影響(71)の可能性もある。

## 6. 保護対策

シギ類ではホウロクシギとともに最も大型の種類であり、ある程度まとまった面積の干潟の保全(または創出)が求められる。また水辺のレジャーが与える影響については、人と生物の住み分けを考えていく必要がある。

## 7. 特記事項

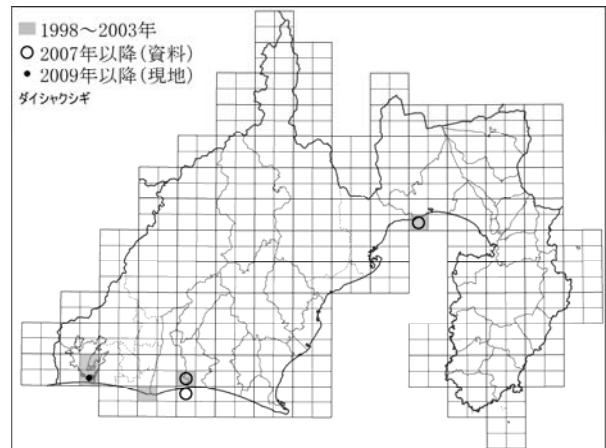
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



富士川河口 2006年4月1日 渡邊修治



(小粥秀治)

# ホウロクシギ *Numenius madagascariensis* (Linnaeus, 1766)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 61 cm。上・下面とも淡褐色で黒褐色の縦斑がある。ダイシャクシギに似るが、褐色味が強く、腰と翼下面が白くない。嘴は長く下に湾曲している。脚は青灰色である。主に干潟などでカニや貝類、ゴカイなどの小動物を採食する。旅鳥 (対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外では、ウスリー、カムチャツカ半島などユーラシア大陸の北東部で局地的に繁殖し、フィリピンからニューギニア、オーストラリアにかけて越冬する。国内では春秋に旅鳥として全国に渡来するが、琉球諸島などでは少数が越冬する。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸にかけて海岸付近での記録があるが、渡来数は少ない。

## 3. 生息環境

主として広い干潟や河口部、海岸付近の水田などに飛来する。

## 4. 生息状況

県内では大規模な干潟が生じる場所が少ないこともあり、生息適地はもともと限られていたが、最近では観察の機会が一層減少してきている。太田川河口においては1996年5月には5羽、2009年4月には7羽を数えたこともある (北川捷康氏私信) が、昨今一地域に飛来するものはほとんどが1~2羽である。2012年以降の近年では太田川河口の他、富士市、浮島ヶ原、浜名湖南部で生息が確認されているが、春は3~4月、秋は9月に観察されることが多いようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

海岸部の埋め立てなどによる水辺環境の悪化 (14)、昼夜を問わない釣りの四輪駆動車の往来をはじめ、ウォーターバイクなどレジャー圧の増加 (71) による採餌や安息への阻害などが考えられる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における捕獲圧 (41) や環境破壊の影響の可能性 (99) もある。

## 6. 保護対策

シギ類ではダイシャクシギとともに最も大型の種類であり、ある程度まとまった面積の干潟の保全 (または創出) が求められる。また水辺のレジャーが与える影響については、人と生物の住み分けを考えていく必要がある。

## 7. 特記事項

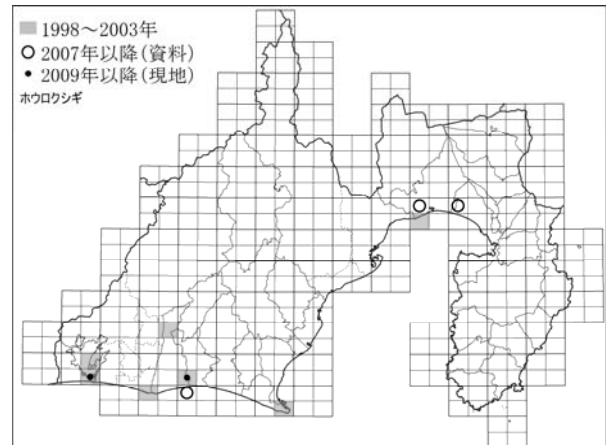
2007年3月16日に太田川河口において、越冬地のオーストラリア・ヴィクトリア州南部でフラッグを装着して放鳥された個体が、繁殖地へ向けて北上中に確認された (今井 敦氏私信)。

## 8. 主な文献

高野伸二 編 (1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



富士川河口 1998年4月29日 渡邊修治



(小粥秀治)

# アカアシシギ *Tringa totanus* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②) : 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 27 cm。雌雄同色。冬羽は上面が灰褐色で下面は白色である。夏羽は上面に黄褐色と黒色の斑があり、下面の縦斑が目立つ。飛翔時には腰の白色と次列風切の白色が目立つ。脚は赤色であるが幼鳥は黄色味がある。干潟や海岸付近の水田、湿地で昆虫類やミミズなどの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の温帯を中心に広く繁殖し、温・熱帯地域で越冬する。国内では北海道東部で繁殖、琉球諸島では越冬し、その他の地域へは主に秋に旅鳥として分布する。県内では沿岸内陸部に記録が点在するが、渡来例は少ない。

## 3. 生息環境

内陸の水田や河川、池沼、湿地などに生息する。ごく稀に河口部のような干潟へ出ることもある。

## 4. 生息状況

県内においては渡来数の非常に少ない種で、出現頻度が低いこともあり、過去の渡来地は限られている。2003年頃まで数年にわたり連続して渡来があった袋井市浅羽地域の水田でも現在では稀な状況となってしまった。県内での観察例はほとんど秋季であるが、2017年4月に磐田市西貝塚において1羽が観察されている(小岸順子氏私信)。過去の多数渡来としては2003年9月に袋井市浅羽地域において27羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。なお、2014年以降では太田川河口、富士川河口、浮島ヶ原(8羽)で生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

もともと県内での観察例は少ない種であるが、近年の出現頻度は更に低下している。生息環境からみれば全国各地の干潟の減少(14)や、水田の圃場整備(15-2)、湿地の開発(15-1)が本種に及ぼす影響は決して少なくないと思われる。

## 6. 保護対策

まとまった水田地帯の保全が望まれる。湿地の確保や再生も重要である。

## 7. 特記事項

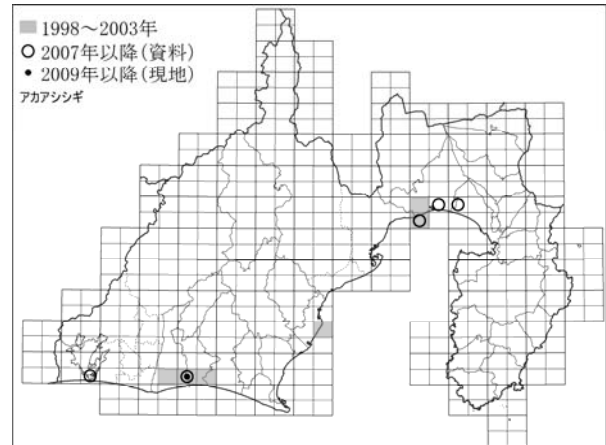
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



袋井市浅羽 2003年9月12日 北川捷康



(小粥秀治)

## コアオアシシギ *Tringa stagnatilis* (Bechstein, 1803)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②) : 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 24 cm。冬羽は上面が青灰色で下面は白色である。夏羽は上面が灰褐色地に白と黒の斑があり、頭から胸にかけては黒褐色の斑がある。嘴は細長く直線的で黒く、脚は細長い。水田や池沼などの湿地で歩きまわりながら昆虫類や甲殻類などの小動物を採食する。水に腹まで浸っているような場所でも、1羽か小群でせわしげに探餌していることがある。旅鳥(対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外ではユーラシア大陸内陸部の温帯域で繁殖し、アフリカ大陸南部、オーストラリアなどで越冬する。国内では主に秋に旅鳥として分布するが、本州、九州では越冬するものがあり、琉球諸島では冬鳥として分布する。県内では局地的に分布し、渡来数は少ない。

### 3. 生息環境

海岸に近い水田や池沼などの湿地に主に秋季渡来する。海岸付近の干潟へ出ることはほとんどない。

### 4. 生息状況

県内においては従来から渡来数の多い種類ではなかったが、最近ではさらに見かける機会が減ってきている。過去には定期的に渡来していた磐田市大池においても、近年では確認できないケースが増えてきた。過去の多数渡来としては 2003 年 9 月に袋井市浅羽地域において 17 羽の観察例がある。春の渡来例は稀であるが、2007 年 4 月に磐田市大池で夏羽の個体が 1 羽記録されている(北川捷康氏私信)。2014 年以降では焼津市田尻、浮島ヶ原、浅羽地域(5 羽)で生息が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種のような淡水を好むシギ類にとっては共通の生息場所である平野部の水田や湿地は、乾田化(15-1)や埋め立て(15-2)などによる開発行為により減少を続けてきており、今なお最も開発の対象とされやすい場所となっている。全国的にも状況はおおむね同様と思われ、長距離を移動するシギ類にとって中継地点となる当該環境の消失は本種の生存に脅威となる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊の影響(71)が関わっている可能性もある。

### 6. 保護対策

袋井市浅羽地域においては、農作業の一環として水田地帯の一部で土地所有者が 8~10 月に田に水を引き入れることにより、本種を含むシギ・チドリ類の生息環境が一時的に創出されている事実があったが、保護にはこうした方法を見ならうべきである(しかし、水張りの行われた一部の農耕地に多種多数のシギ・チドリ類が集結することで、写真撮影などの車が多数殺到して近隣住民とのトラブルが発生するといった状況が起こり、保護上の新たな問題となっている)。

### 7. 特記事項

特になし。

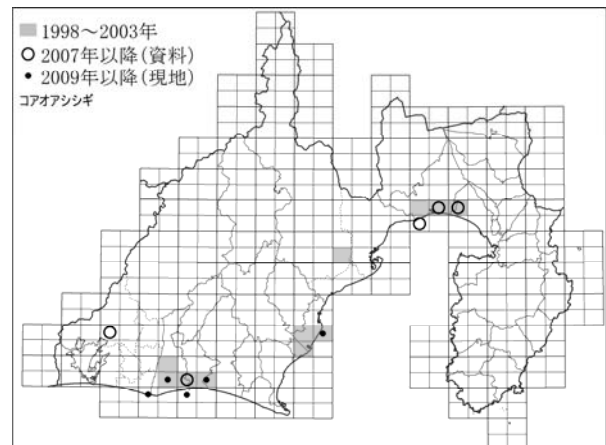
### 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥。山と溪谷社、東京、591 pp.

(小粥秀治)



袋井市浅羽 2003年9月16日 中村裕志



静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

全長約 21 cm。夏羽は上面が黒褐色地に白色の小斑があり、胸部、脇には黒褐色斑がある。腹は白色である。冬羽は上面や胸の斑は不明瞭になる。雌雄同色。嘴は黒く直線的で脚は黄緑色である。水田や河畔、池沼、湿地で主として昆虫類を採食する。稀に越冬する個体もいる。旅鳥 (対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の亜寒帯から寒帯で広く繁殖し、アフリカ南部、インド、東南アジア、オーストラリアなどで越冬する。国内では全国に旅鳥として分布するが、本州、四国、九州では一部越冬するものもいる。県内では伊豆半島を除いた各地の平野部に分布する。

### 3. 生息環境

水田や河畔、池沼など淡水域の湿地に生息する。河口部のような海岸付近へ出ることはない。泥質の環境を好み、泥地が広がっているような場所では小群で採食しているところを見かける。

### 4. 生息状況

従来はごく普通に観察された種である。1970年代には100羽ほどの群れの記録 (2003年9月袋井市浅羽地域における113羽の観察例: 北川捷康氏私信) もあるが、近年著しくその数を減じ、観察の機会も減少している。シギ類は総体的に近年減少が目立つが、その中でも特に急激な減少が顕著な種である。2013年以降では、掛川市 (7羽)、湖西市、磐田市福田、富士市、浮島ヶ原、浜名湖北部、浅羽地域で生息が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種を含む淡水域を好むシギ類の減少は、共通の生息場所である平野部の水田の乾田化 (15-2) や湿地の埋め立て (15-1) などの開発行為が、要因として相当の影響を及ぼしているのは事実である。しかし環境変化がそれほど顕著ではないと思われる地域での減少も進んでいて、長距離を移動するシギ類にとっては国外の渡りの通過地域における捕獲圧 (41) や環境変化 (71) が個体数の変動に大きく関わっていることも十分に考えられる。なお、水田においては定期的な農薬散布が実施されているところも多いが、これについての影響は不明である。

### 6. 保護対策

袋井市浅羽地域では、農作業の一環として8~10月に田に水を引き入れるため、本種を含むシギ・チドリ類の生息環境が一時的に創出されている事実があったが、保護にはこうした方法を見ならうべきである (しかし、水張りした一部の農耕地に多種多数のシギ・チドリ類が集結することで、写真撮影などの車が多数殺して近隣住民とのトラブルが発生し、保護上の新たな問題となっている)。

### 7. 特記事項

特になし。

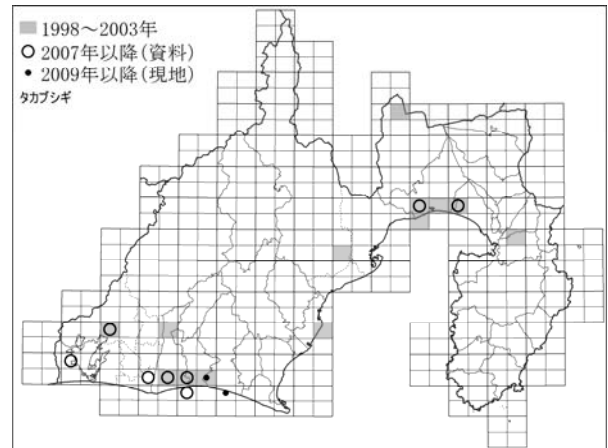
### 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(小粥秀治)



磐田市鎌田 1991年4月30日 北川捷康





# オジロトウネン *Calidris temminckii* (Leisler, 1812)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 14 cm。雌雄同色。夏羽は頭上から胸にかけて黄褐色で黒い縦斑がある。上面も黄褐色で黒い軸斑がある。腹は白い。冬羽の上面及び胸は暗灰色である。嘴は短くて黒く、脚は黄褐色である。水田や河川、湖沼、湿地で昆虫類の幼虫やミミズなどの小動物を採食する。旅鳥、一部越冬(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の寒帯で繁殖し、アフリカ大陸中央部、インド、東南アジアなどで越冬する。国内では旅鳥として全国的に分布するが、一部越冬する。県内では秋季旅鳥として通過する個体と越冬する個体があり、富士市から浜名湖にかけての平野部に記録があるが、生息地は限られる。

## 3. 生息環境

水田や河川、池沼、湿地の泥地などに生息する。

## 4. 生息状況

浜名湖、天竜川、磐田市大池、袋井市浅羽地域の水田、大井川河口付近の廃養魚場、富士川河口、浮島ヶ原などに生息していたが、湿地の埋め立て、河川改修により数少ない生息場所はさらに限定されてきている。過去の多数渡来としては 2009 年 10 月に磐田市大池において 7 羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。2008 年以降は、上記大池の他、浜松市鶴見町の天竜川河川敷、浅羽地域、浮島ヶ原で生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修工事による河川内の州の消失(13)、湿地の埋め立て(15-1)により、生息適地は減少している。元来、生息地が限定されていた種だけに、生息環境の破壊はそのまま地域的な絶滅につながるおそれ大きい。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における捕獲圧(41)や環境破壊、温暖化の影響(71)が関わっている可能性もある。

## 6. 保護対策

従来からの定期的な渡来地、生息地を再確認のうえ、当面は現存する生息環境の保全・維持対策が急務と考える。一時的な飛来地である水田などの確保も重要である。

## 7. 特記事項

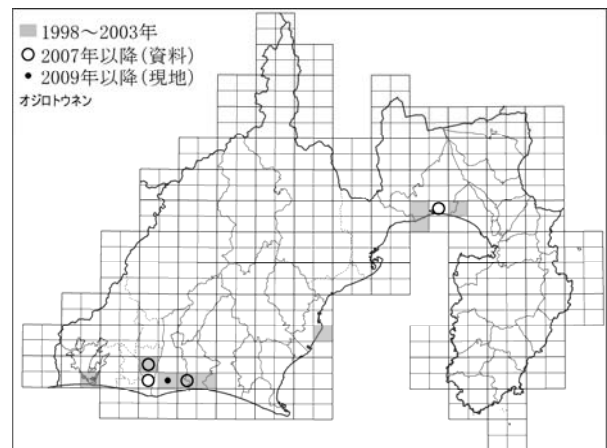
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



浜松市中区上島 1987年11月15日 中村裕志



(小粥秀治)

## ヒバリシギ *Calidris subminuta* (Middendorff, 1853)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 14 cm。雌雄同色。夏羽は頭上から上面は茶褐色で、頭中央線両側の白線が目立つ。胸側には茶褐色と黒色の小斑があり、腹は白色である。冬羽は全体的に茶褐色味が乏しくなる。嘴は黒色で脚は黄緑色である。水田や湿地を好み、昆虫類の幼虫などの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外ではシベリア北東部の亜寒帯で繁殖し、インド、東南アジアやオーストラリアで越冬する。国内では主に秋に旅鳥としてほぼ全国に分布するが、本州、九州では一部越冬する。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸に沿った内陸湿地で記録があったが、近年は観察機会・個体数ともひどく減った。

### 3. 生息環境

内陸の水田や河川、池沼、湿地などに生息する。ごく稀に河口部のような干潟へ出ることもある。

### 4. 生息状況

県内では従来から渡来数の少ない種類であったが、過去に生息していた場所においても、現在では生息できない環境に変化してしまったケースが多くなった。春季の渡来例はほとんどない。過去の多数渡来としては2003年9月に袋井市浅羽地域において6羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。2003年以降は、掛川市(4羽)、磐田市大池、浅羽地域(3羽)で生息が確認されている。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種のような内陸湿地を好むシギ類にとって共通の生息場所である平野部の水田の圃場整備による乾田化(15-2)や湿地の埋め立て(15-1)などの開発行為により減少を続けてきており、この傾向は今後も続く予測される。全国的にも状況はおおむね同様と思われ、長距離を移動するシギ類にとって中継地点となる当該環境の消失は本種の生存に脅威となる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊、かすみ網による大規模な捕獲圧(41)、温暖化の影響(71)などが関わっている可能性もある。

### 6. 保護対策

本種が利用する水田や湿地のような場所が一般的な認識ではさほど重要視されていない。そのような環境が本種にとって重要であるという事実もほとんど知られておらず、啓発が必要である。

### 7. 特記事項

特になし。

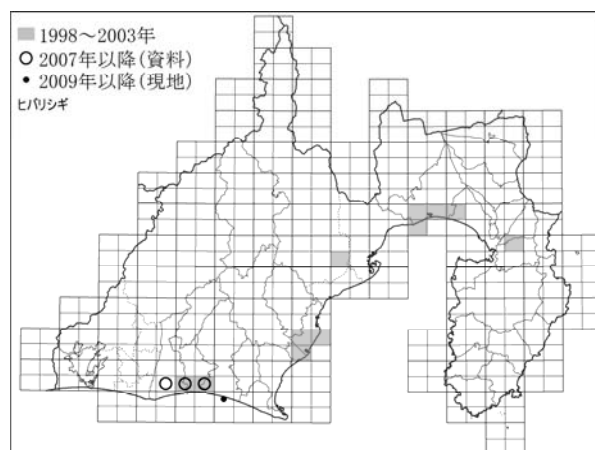
### 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥。山と溪谷社、東京、591 pp.

富田 宏・柏木 実 ラムサール・ネットワーク日本(2014) 絶滅の危機! ヘラシギを救うために パードリサーチ水鳥通信 4: 4



袋井市浅羽 2003年9月16日 中村裕志



(小粥秀治)

# ウズラシギ *Calidris acuminata* (Horsfield, 1821)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 21 cm。雌雄同色。オスがやや大きい。夏羽は上面黒褐色で羽縁が褐色、頭頂は赤褐色である。顔から脇にかけて黒斑があり、腹は白色である。冬羽の上面は褐色味が少なく、下面の斑も不明瞭となる。嘴は黒色で脚は黄緑色である。水田や湖沼、草地や湿地を好み、昆虫類などの小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではシベリア東部の寒帯で局所的に繁殖し、ニューギニア、オーストラリア、ニュージーランドなどで越冬する。国内では春秋に旅鳥として渡来し、全国に記録がある。県内では伊豆半島を除く駿河湾沿岸部から遠州灘沿岸に沿った内陸湿地に渡来するが、分布地も個体数もきわめて少ない。

## 3. 生息環境

水田や河川、池沼、草地や湿地などに生息する。

## 4. 生息状況

県内では従来から渡来数の多い種ではなかったが、過去に生息していた場所においても、生息不可能な状態になってしまっているか、または渡来が途絶えるなどして現在は渡来数が非常に少なくなっている。過去の多数渡来としては1979年5月に浜松市村櫛町で21羽、1996年10月には磐田市大池で5羽の観察例がある(北川捷康氏私信)。2007年以降は、御前崎、浮島ヶ原、磐田市大池で生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

本種のような淡水を好むシギ類にとっては共通の生息場所である平野部の水田や湿地は、埋め立て(15-1)などによる開発行為により減少を続けてきており、この傾向は今後も続くと思われる。全国的にも状況はおおむね同様と思われ、長距離を移動するシギ類にとって中継地点となる当該環境の消失は本種の生存に最大の脅威となる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊、かすみ網による大規模な捕獲圧(41)、温暖化の影響(71)などが関わっている可能性もある。

## 6. 保護対策

本種が利用する水田や湿地のような環境が一般的な認識ではさほど重要視されていない。そのような環境が本種にとって重要であるという事実もほとんど知られておらず、啓発が必要である。

## 7. 特記事項

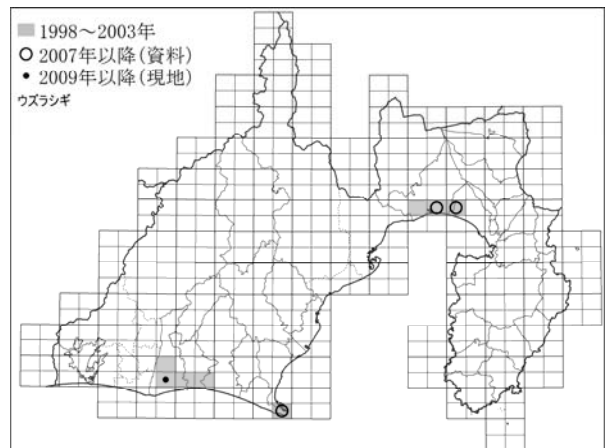
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



富士市檜浮島ヶ原 2012年5月8日 渡邊修治



(小粥秀治)

# ハマシギ *Calidris alpina* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更コード7

[2004年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

## 1. 種の解説

全長約 20 cm。渡来期から越冬期の冬羽は上面が灰色、顔と腹面は白い。飛行時に翼の白帯が目立つ。渡去前には夏羽になり、背面は黒い軸羽のある赤褐色羽に、腹には大きな黒い斑ができる。雌雄同色。長めの嘴はやや下方に曲がっている。餌は小貝類、トビムシ、ミミズ、ゴカイのほか昆虫類、クモ類など。干潟での採餌法は泥中に嘴の先端を入れたまま歩きながら獲物を捕らえる。干潟では干潮に合わせて夜間でも採餌する。日本を含む東アジアで越冬するのは北アメリカ北極海沿岸で繁殖する亜種キタアラスカハマシギ *C. alpina arctica* である。冬鳥 (対象：越冬地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア、北アメリカの極北の沿岸部で繁殖し、ヨーロッパ、アフリカ中北部、中東、中国、北アメリカなどの沿岸部で越冬する。国内では本州以南で越冬する。県内では東・中・西部の大河川の河口部及び西部では河川の内陸部、満潮時には海岸に近い内陸湿地にも分布する。

## 3. 生息環境

干潮時に干潟が出る環境を最も好む。一般的には内陸部へはあまり入ることがないが、西部地域はおそらく全国的にも特別なようで、遠州灘の海岸から比較的近い内陸湿地にも生息し、天竜川では内陸部の低水路、中州の砂礫や広場の芝生地にも多数が入る。

## 4. 生息状況

浜名湖、天竜川河口、太田川河口などに最も多く、干満差の少ない河口部にも少数が生息する。磐田市大池や袋井市浅羽の水田など海岸から 2~4 km の内陸部の湿地や、天竜川では河口から内陸 23 km 付近まで採餌に入る (飛竜大橋南, 2008. 2. 12 25 羽)。筆者の調査 (太田川・天竜川河口) では 1996 年の 520 羽から 2017 年の 33 羽に至るまで、急激な減少を示している。なお、富士川河口では 2008 年までは 100 羽台と安定していたが、2010 年以降はまったく観察されない年もあるという (渡邊修治氏私信)。

## 5. 減少の主要因と脅威

干潟の浚渫や造成 (13)、天竜川では中流部までの砂利採取 (13) が最大の脅威になる。主な採餌や休息場所の天竜川や太田川の砂嘴付近やそれに続く海岸線が、生息期全体を通して釣り、ウィンドサーフィン、エンジン付きパラグライダー、四駆車往来のレジャー圧 (71) を受け続けていることが挙げられる。

国外の状況では、北米の北極圏内を繁殖地とするシギ・チドリ類 6 種の雪解け時期・気温などは生存率への影響はなく、唯一本亜種のみ生存率が低かった。その理由が、東アジアの中継地・越冬地の減少やかすみ網による大規模な捕獲圧 (41) と考えられている。

## 6. 保護対策

干潟の浚渫や造成及び河川環境の安定に留意することが必要である。

## 7. 特記事項

なし。

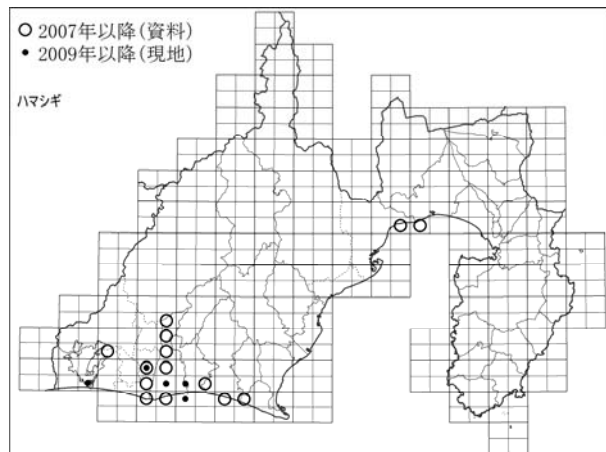
## 8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

守屋年史 (2018) 冬のハマシギが減少中. バードリサーチ水鳥通信, 1: 1



浜松市村櫛 1997年5月5日 北川捷康



(北川捷康)

# キリアイ *Limicola falcinellus* (Pontoppidan, 1763)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

## 1. 種の解説

全長約 17 cm。雌雄同色。夏羽は上面が赤褐色で黒色の軸斑があり、白い頭側線及び眉斑が目立つ。胸から脇にかけては黒斑があり、腹は白色。冬羽の上面は灰褐色を呈する。嘴は黒くて先端部がやや下に曲がり、脚は黒色である。干潟や水田、湿地を歩きまわりながら、昆虫類、水生の小動物を採食する。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外ではユーラシア大陸の寒帯で局地的に繁殖し、南半球の温・熱帯で越冬する。国内では春秋に旅鳥として渡来し、ほぼ全国に記録がある。県内での観察例はほとんどが秋季であり、伊豆半島を除く駿河湾から遠州灘沿岸に、主として幼鳥が1~数羽渡来する程度で分布地も個体数も少ない。

## 3. 生息環境

河口部や干潟、海岸に近い水田、湿地に生息し、泥質の場所を好む。県内では泥質干潟が出る場所が少ないこともあって、水田に飛来するものを見かけることが多い。

## 4. 生息状況

県内では従来から渡来数の多い種類ではなかったが、さらに渡来数、渡来頻度は減少している。湿地などの生息環境に大きな変化が生じた場合には、地域的な絶滅の可能性も否定できない。過去の多数渡来としては2005年5月に御前崎海岸で10羽(北川捷康氏私信)、2007年8月に太田川河口で18羽の観察例がある(今井敦氏私信)。2011年以降は、太田川河口の他、浅羽地区、浜名湖南部、浮島ヶ原で生息が確認されている。

## 5. 減少の主要因と脅威

水田の圃場整備による乾田化(15-2)や湿地の埋め立てなど(15-1)により生息場所は減少を続け、今なお最も開発の対象とされやすい場所となっている。全国的にも状況はおおむね同様と思われ、長距離を移動する本種にとって中継地点となる当該環境の消失は生存に脅威となる。また、状況の把握は困難であるが、海外の生息地における環境破壊や温暖化の影響(71)が関わっている可能性もある。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

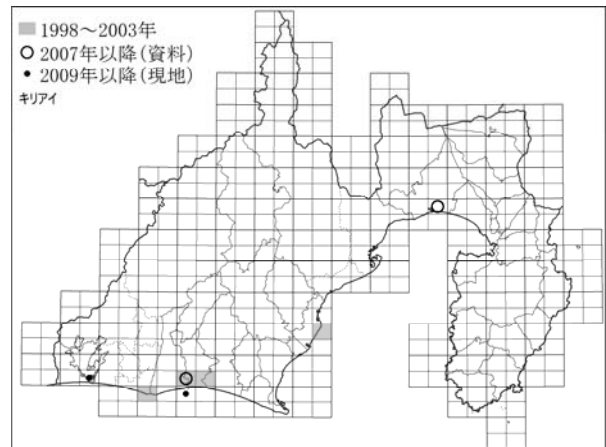
特になし。

## 8. 主な文献

高野伸二 編(1985) 山溪カラー名鑑 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 591 pp.



富士市五貫島 2006年8月15日 渡邊修治



(小粥秀治)

# タマシギ *Rostratula benghalensis* (Linnaeus, 1758)

タマシギ科 Rostratulidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 24 cm。オスは頭中央線があり、上面は褐色で喉から胸は黒褐色。上面はメスに比べて褐色味がある。メスは頭が灰褐色で淡黄色の頭中央線がある。アイリングとその後方は白、額から頸は濃赤褐色で胸から脇にかけ白線があり、背にある黄褐色の線につながる。上面は緑色味を帯びた灰褐色。水田、休耕田で甲殻類、貝類、昆虫類の幼虫、ミミズなどを採食する。メスがさえずり、地味な色彩のオスが抱卵や育雛などを行う。雌雄の形態と習性の特徴が普通の鳥と逆になっている一妻多夫の変わった生態を持つ。留鳥 (対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外では中国、東南アジア、インド、アフリカ南東部・中西部などで留鳥として生息する。国内では北海道、南千島、本州、四国、九州、佐渡、見島、対馬、種子島、トカラ列島、奄美大島、琉球諸島に生息し、本州中部以南では留鳥または漂鳥である。県内では伊豆をのぞく地域に分布する。

## 3. 生息環境

留鳥として、平地の淡水湿地、水田、河川敷、用水路、草地に生息する。繁殖期の観察は水田が主となり、冬期では河川敷、水路での観察例が多い。西部の一地域では、水田に囲まれた放棄水田 (1 反程のヨシを中心とした高茎草地) での繁殖が稀ならず確認され、同地ではヒクイナ、オオヨシキリも例年のように繁殖が確認される。

## 4. 生息状況

静岡県 RDB 2004 以後の推移として、伊豆は本調査でも確認記録はなかった。東部は 3 メッシュから 2 メッシュに、中部は 5 メッシュから 2 メッシュに、西部は 8 メッシュから 12 メッシュとなったが、本種は夜行性の傾向が強く、その生息環境は踏査困難な場合があるため記録出来ない可能性も残る。

## 5. 減少の主要因と脅威

河川改修 (13)、水田の乾田化、用水路の 3 面護岸化 (圃場整備) により餌となる土壌生物や水生生物の消滅及び退避地、営巣地としての草地消滅 (15-2) など利用可能な生息地の減少が主要因である。

## 6. 保護対策

1970 年に施行された米の減反政策も 2018 年 4 月を持って終了となる (政府発表)。これを機にコメ農業の大規模化や会社組織の法人化などが加速し新たな開発問題が危惧される。現存する水田の保持存続は絶対条件であり、保全に際しては農家の理解と協力が不可欠である。

## 7. 特記事項

特になし。

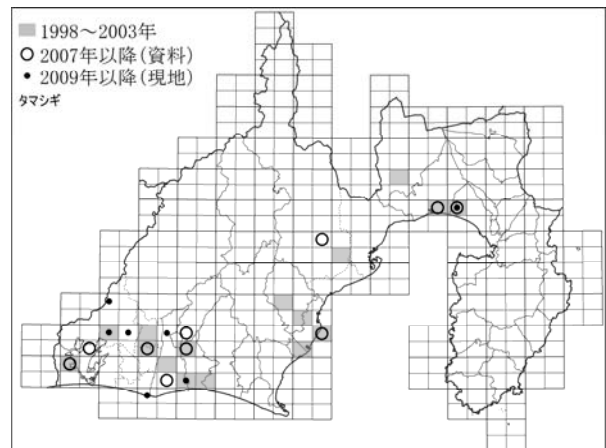
## 8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(森田剛則)



左：オスと雛 浜松市 1992年5月20日 北川捷康  
右：メス 浮島ヶ原 2006年6月2日 渡邊修治



静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT) ]

### 1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス約 57 cm、メス約 60 cm である。翼開長 121~135 cm。体色は上面が褐色ないし暗褐色であるが、下面はかなり白っぽい個体から暗褐色の個体まで、個体によって様々である。体下面の斑や、喉の模様、尾羽の黒色帯も個体により違いがある。また、オス成鳥の眼は暗褐色で、メス成鳥の眼は黄色である。日本には夏鳥として渡来する。ハチの幼虫を好んで採食することや、翼を上方で打ち合わせるディスプレイ飛行を行うなど、タカ類の中でも特異な習性がある。夏鳥（対象：繁殖地）。

### 2. 分布

国外ではヨーロッパ及びアジアに、国内では北海道、本州、四国、九州に夏鳥として渡来し繁殖する。県内ではこれまでの観察例から低山帯に広く分布していると考えられる。標高 500 m 以下の低山が中心であり、高標高の山間地では少ない。

### 3. 生息環境

本種の分布は、広葉樹林など自然性の高い林の広さと密接な関係があるといわれている。餌はハチの幼虫を主とする昆虫や、カエル、トカゲなどであることから、これらが多く生息する落葉広葉樹林、草地、山間の水田、湿地などが重要な生息環境となる。採餌のために営巣地から数 km 先まで出かけることも稀ではなく、生息地には多様な環境が含まれている。

### 4. 生息状況

きわめて広範囲を飛行することから、生息はしていても営巣地が発見されることは稀である。もともと、静岡県には高密度で分布していたわけではないが、近年の減少傾向は顕著である。以前には常緑及び落葉広葉樹林が比較的多い西部の丘陵地で繁殖例が多かったが、現在の繁殖情報はきわめて少ない。

### 5. 減少の主要因と脅威

生息適地である平野部から低山にかけての里山環境が、道路建設（24）、平坦化する宅地・農地などの様々な開発行為（11、23）により改変されていることが減少の主要因と考えられる。本種は食物をハチに強く依存していることから、生息の動向はハチの発生状況や乱獲にも関係している可能性がある。

### 6. 保護対策

自然林や草地、湿地などを含む環境を保全する必要があるが、その規模は複数の市町村にまたがるほどとなる。そのため、造林地や農地も含めた広範な地域の中で、落葉広葉樹林や草地、湿地などを含む多様な環境を育成することが保護につながるものと考えられる。

### 7. 特記事項

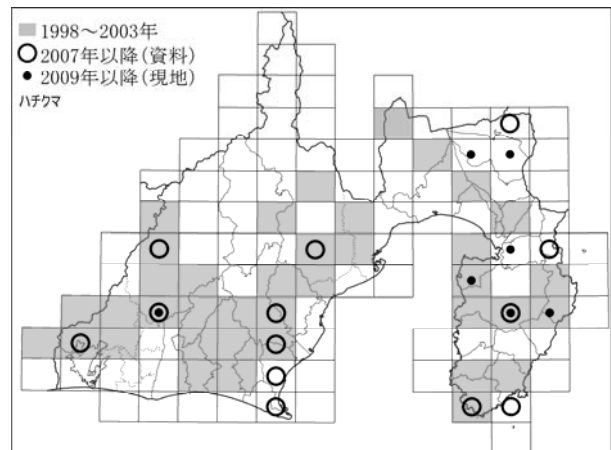
越冬地の中心は東南アジアであり、中国内陸部を通過する長距離の渡りをすることで知られている。

### 8. 主な文献

久野公啓（2015）ハチクマ．バードリサーチニュース，12(9)：1-2



牧之原市 2010年7月21日 新井 真



以前には常緑及び落葉広葉樹林が比較的多い西部の丘陵地で繁殖例が多かったが、現在の繁殖情報はきわめて少ない。

(新井 真・近藤多美子)

# ハイタカ *Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧(NT)]

## 1. 種の解説

オオタカと近縁でやや小型のタカである。全長オス約30 cm、メス約37 cmである。翼開長オス60.5~64 cm、メス71.5~79 cm。成鳥は頭部から背面、尾上面が灰色、下面は白っぽく胸から腹にかけてオスはオレンジ色、メスは褐色の横縞がある。幼鳥はメス成鳥に似るが褐色味が強い。森林性のタカであり、小鳥類を捕食する。留鳥または冬鳥(対象:繁殖地、越冬地)。

## 2. 分布

国外では極北を除くユーラシア大陸に広く分布する。国内では本州中部以北で繁殖し、冬期は全国で見られる。県内では山地で周年観察されるが、渡りをするタカであることから、冬期には低山で見られる機会が増える。

## 3. 生息環境

営巣地は標高のやや高い山地の林で、中型のタカよりもやや密な林を利用する。採餌には林縁や開放的な環境も利用している。冬期に観察されるものは、茶畑、果樹園やその周囲の林、時には水田や市街地上空などで小鳥を狩る。

## 4. 生息状況

県内での繁殖の確認は少なく、繁殖期における生息の確認は、中部から西部地方の北部と、東部地方の標高1,000 m前後の山間地である。小型ゆえに確認が難しく、繁殖状況に関する不明な点が多い。冬期に低山や平野部で見られるものは大陸や北方から飛来する越冬個体である。

## 5. 減少の主要因と脅威

詳細は不明だが、人工林の割合が多い県内の山林では、繁殖期における小鳥類の生息密度が低いいため、餌環境が悪い(71)と推測される。

## 6. 保護対策

山地における自然林の保全、育成が必要と考えられる。

## 7. 特記事項

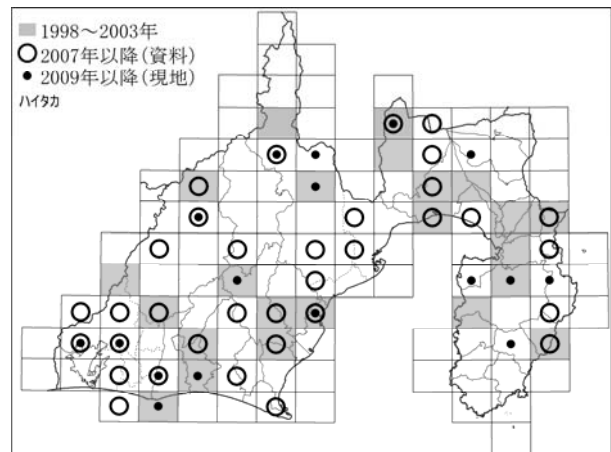
特になし。

## 8. 主な文献

平井克亥(2013)ハイタカ. バードリサーチニュース, 10(6): 3-4



沼津市原浮島ヶ原 2005年11月25日 渡邊修治



(新井 真・近藤多美子)



## サシバ *Butastur indicus* (Gmelin, 1788)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス約 47 cm、メス約 51 cm。翼開長 102~115 cm。成鳥は顔が灰色、頭部から背面、尾の上面が赤褐色で、下面は白っぽく胸から腹にかけて褐色の横縞がある。尾には褐色の横帯が 3~4 本ある。幼鳥は成鳥に似るが胸から腹にかけて縦斑がある。「ピッ、クイー」と特徴的な声でよく鳴く。カエル、ヘビなどの両生類、爬虫類と、バッタなどの昆虫類を主食とする。夏鳥 (対象: 繁殖地)。

### 2. 分布

国外では極東の一部で繁殖し、冬季は東南アジアに渡り越冬する。国内では主として東北地方以南に夏鳥として渡来する。県内における最近約 10 年間の主な観察例は、標高 200 m 以下の山麓農村部にある。

### 3. 生息環境

樹林と水辺や湿地、草地がある谷戸環境を有する里山が生息適地であるが、本県における水田との関連性は高くはないと考えられる。営巣地は、生息地の中でも比較的樹齢の高い林で、林縁部に近い場所に架巢することが多い。採餌環境としては林縁または農耕地、山林内のギャップも利用される。

### 4. 生息状況

1980 年頃までは県内全域の低山で普通に見られたが、その後減少傾向が著しく、特に中部・東部では繁殖期の確認が非常に少ない。西部と伊豆ではまだ連続的に分布しているところもあるが、繁殖つがい数の減少は、掛川市では平成 17 年の約 6 割減と報告され、静岡空港周辺でも同程度減少している。近年の道路整備、農地造成などにより生息が途絶えた場所がある。

### 5. 減少の主要因と脅威

餌の両生類、爬虫類やバッタなど昆虫類が生息する環境の減少が主要因と考えられる。これには、道路建設 (24)、宅地開発 (23)、農地開発 (15-2) など様々な開発行為が直接関係している。農地開発においては、農業規模の大型化や機械化に伴う農地形状の変更が餌生物を減少させる。また、里山における小規模耕作地 (水田のほか茶畑、ミカン園など) の放棄による樹林化 (53) が、採餌環境の減少につながる。

### 6. 保護対策

生息環境である里山や内陸部の湿地の保全や復元、餌生物を含む総合的で早急な環境保全を考えなくてはならない。開発にあたっては、餌となる小動物の生息に配慮した構造及び工法にする必要がある。

さらに、近年鳥獣害対策として普及した電気柵やネットなどが採餌の障害になる可能性を示唆する情報があり、保護対策として、詳細な生態や生息状況に関する調査も必要と考えられる。

### 7. 特記事項

秋の渡りで中部地方を通過するサシバは、静岡県で数千~1 万羽記録されている。渡りの中継地や越冬地の生息環境の変化や密猟も個体数の増減に関係している可能性がある。

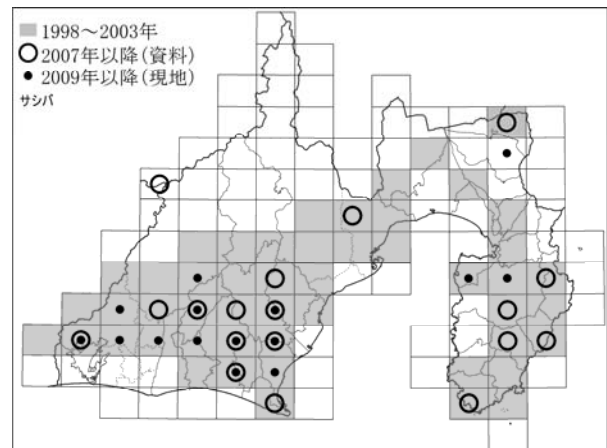
### 8. 主な文献

掛川市 (2016) 平成 27 年度掛川市自然環境調査集約事業報告書。掛川市, 掛川, 282 pp.

静岡県文化・観光部空港振興局空港運営課・静岡県静岡空港管理事務所・常葉学園 富士常葉大学・自然環境巡視連絡会 (2016) 富士山静岡空港自然誌-人と自然にやさしい空港をめざして-。静岡県, 静岡, 353 pp.  
(新井 真・近藤多美子)



©2019 S. Watanabe  
富士宮市 2011年9月29日 渡邊修治



静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

### 1. 種の解説

イヌワシと並ぶ大型の猛禽類で全長オス 70~74 cm、メス 77~83 cm である。翼開長オス 140 cm、メス 165 cm。成鳥は顔が黒く、後頭に冠状に逆立つ羽毛がある。頭部から背面は褐色で、下面は白っぽい。胸には縦斑、腹には横縞がある。尾には黒い横帯が 4~5 本ある。幼鳥は全体的に成鳥よりも淡色で、顔から胸は特に白く見える。森林性のタカであり、ノウサギ、ムササビやヤマドリのほか、小型の哺乳類や小鳥、ヘビ、カエルなど多様な生物を捕食する。留鳥 (対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外ではアジア南部から東部に分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に生息し、各地で繁殖が確認されている。県内では標高 300 m 以上、高標高地に至る山地に広く分布し、周年生息する。富士山と箱根山麓では、地形的要因のためか、生息地は確認されていない。

### 3. 生息環境

山地の森林が主な生息環境である。営巣地は樹齢の高い林で、営巣木は特に樹高のある大木を利用する。採餌行動は山間の伐採地などで観察されることが多いが、林内も利用する。森林地帯での狩りに適応しており、多様な環境を含む森林地帯が生息適地である。

### 4. 生息状況

複数の地域での観察情報をあわせると、前回 (2004 年) 以降、分布状況に大きな変化はないようだが、低標高地における新たな繁殖例がいくつか観察されている。繁殖成功率の低下が懸念される一方で、連続または隔年繁殖が観察される例もあるなど、地域による差が散見される。

### 5. 減少の主要因と脅威

過去からの個体数データは少なく増減は不明であるが、生物相豊かな自然林の減少 (11) は、本種の生息環境の質を低下させ、生息への脅威になると考えられる。本県では伐採跡地や植林直後の幼齢林など開放された空間の他、間伐や枝打ちがされて林床に光が入り下層植生が発達した林も狩場として利用する。しかし、近年は植林地の手入れが少なく (53)、それが生息環境を悪化させていることも報告されている。

### 6. 保護対策

猛禽類の餌場環境創出を目的とした列状間伐が各地で実施され、他県では餌となるノウサギの増加が報告されている。針葉樹人工林の多い本県の場合、森林の多様性を高めるための低密度植栽、広葉樹林化などのあらゆる施策が、生態系の底辺を担う生物相を豊かにし、ひいては高次消費者の大型猛禽類の長期的な保護対策につながるものと考えられる。

### 7. 特記事項

種の保存法に基づく国内希少野生動物種 (平成 5 年)。

### 8. 主な文献

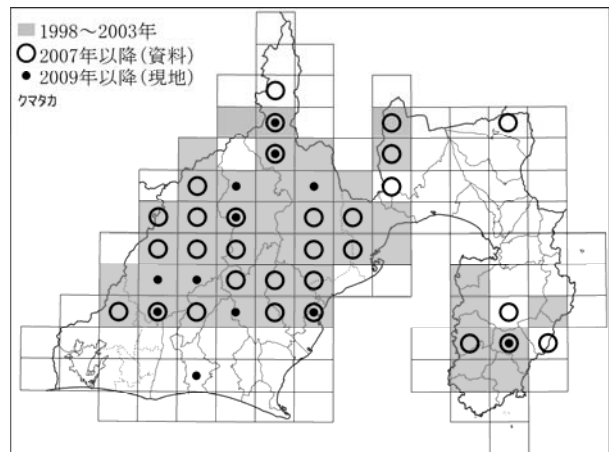
掛川市 (2016) 平成 27 年度掛川市自然環境調査集約事業報告書。掛川市, 掛川, 282 pp.

静岡県くらし・環境部環境局自然保護課 (2006~2016) 自然環境保全協定資料。

日本鳥学会 (2008) 森林性大型猛禽類の採餌環境改善の取り組みとその課題。2008 年日本鳥学会自由集会要旨集。



©2019 S.Watanabe  
静岡県内 2009年2月7日 渡邊修治



(新井 真・近藤多美子)

## アオバズク *Ninox scutulata* (Raffles, 1822)

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-①②)変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) : 環境省カテゴリー なし]

### 1. 種の解説

全長約 29 cm。雌雄同色。体上面は濃褐色、体下面は白色で濃褐色の粗い縦斑がある。頭に羽角はなく丸坊主風、顔盤があまり発達していない。虹彩は黄色。夏鳥として4月下旬から5月中旬頃に渡来し、10月頃に渡去する。ガ、コウチュウ、セミなどの昆虫類が主な餌で、小鳥やコウモリも食物とする。夜行性で、夕闇とともに、「ホッ ホッ」と二声ずつ続けて鳴く。夏鳥(対象：繁殖地)。

### 2. 分布

国外ではインド、東南アジア、中国南部、朝鮮半島、ウズベキスタンに、国内では夏鳥として全国に分布する。県内では平野部から低山にかけての市街地周辺、里地、里山に分布する。

### 3. 生息環境

平地から低山にかけての広葉樹林に生息する。

### 4. 生息状況

社寺のクスノキなどの大木の樹洞を巣として利用する傾向が強い。繁殖には、毎年同じ樹洞を使う。繁殖後は、分散して里地・里山の広葉樹林に生息する。かつては、各地に生息し、フクロウとともに最もなじみのあるフクロウ類であった。近年では、生息数が極端に減り、鳴き声を聞くことも珍しくなってしまった。

### 5. 減少の主要因と脅威

社寺の営巣できる樹洞のある大木は、以前と比べ大きく減少しているようには感じられないが、オシドリなどとともに河川に架かる橋梁を利用した繁殖例もあり、自然の営巣環境の悪化は否めない。里地・里山の荒廃(54)による採餌環境の悪化の影響も大きいと思われる。全国的に減少しており、越冬地の開発に伴う環境破壊(71)によるところも大きい。ネオニコチノイド系農薬の使用(32)により、餌の昆虫類が減少していることも危惧される。

### 6. 保護対策

社寺林や里山の大木を含んだ緑地を保護する必要がある。全国各地で、設置した巣箱による繁殖が確認されており、営巣が可能な林に巣箱をかけることも有効である。

### 7. 特記事項

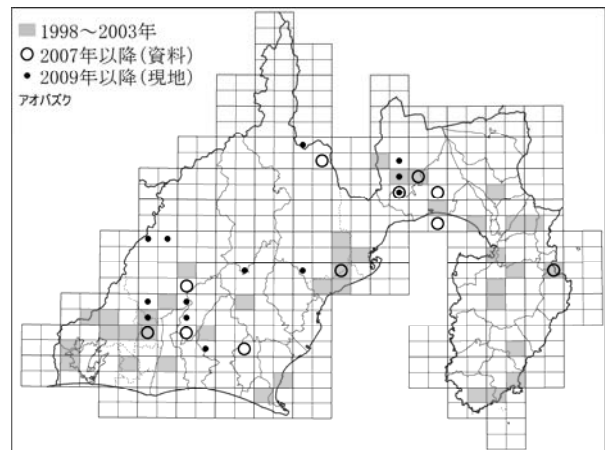
43の都府県のレッドデータブックに記載されている。

### 8. 主な文献

日本野鳥の会静岡支部(1982) 静岡市におけるアオバズクの分布と生息環境. *Strix*, 1: 93-102



磐田市中泉 1995年8月14日 北川捷康



(川合正晃)

## 1. 種の解説

全長約 27 cm。太くて大きな赤い嘴を持ち、全身が赤褐色のカワセミ類。腰の部分に青い羽毛がある。雌雄ほぼ同色である。梅雨の時期に「キョロロロロロ・・・」と尻下がりの特徴的なさえずりが聞かれることから、水乞い鳥の方言名がある。餌としてモリアオガエルなどのカエル類、サワガニ、小魚などの他に昆虫類も捕食する。夏鳥(対象:繁殖地)。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島からやや北の地域及びヒマラヤからインドネシアまで繁殖する。国内では北海道から南西諸島まで夏鳥として繁殖し、台湾以南で越冬する。県内では西部地域には多く、東部・伊豆地域にはきわめて少ない。

## 3. 生息環境

標高 200 m 前後の丘陵地から山地の沢や湿地のある落葉広葉樹林に生息する。朽ち木に穴を穿って営巣する。大径木の朽ち木が少なくなり、住宅難から大きなスズメバチの巣に穴をあけて営巣した例が 1988 年に初報告されて以来、各地で聞かれるようになった。50 年以上も前に、全国屈指の野鳥の多い富士山麓地域にはよい落葉広葉樹林が広がっているのに、本種だけが稀であることとその理由を指摘した学者がいた。水(沢)が乏しいからであると(清棲, 1966)。

## 4. 生息状況

5 月下旬頃に渡ってきて落葉広葉樹林に生息し繁殖する。東部・伊豆地域は以前どおり少なかったが、西部・中部地域では 2016 年に精査した結果、予想以上に生息していることが明らかになった。温暖化の影響かどうか、この状態が続くのかどうかは即断できないが、個体数の面だけを見れば当面の危機はないと思われるので、カテゴリーを 1 ランク下げて様子を見ることにした。

## 5. 減少の主要因と脅威

戦後の拡大造林から近年に至るまで奥地に至る広大な落葉広葉樹林が伐採(11)されてスギ・ヒノキの人工林に変わり、生息適地の森林環境と営巣可能な大径木が減少した。

## 6. 保護対策

樹洞を利用する種は巣箱設置により保護が可能になるが、全国各地で巣箱設置が行われているにもかかわらず、本種が巣箱を利用したとの報告例はなかった。そこで、コルクを用いた新たな巣箱が開発され、期待が寄せられている。

## 7. 特記事項

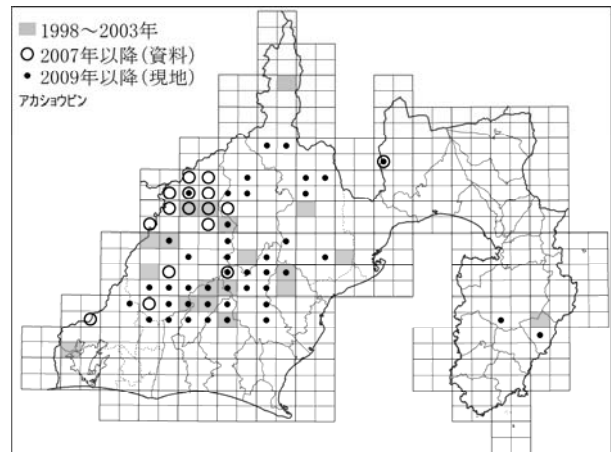
生息・繁殖環境ともに悪化しているし、保護用に設置した巣箱も利用していないのにも関わらず個体数が維持されている状況は理解の域を超えている。夏鳥の多くが減少傾向にある一方で、サンコウチョウ、キビタキ、サンショウクイなど増加あるいは復活の傾向が見られる種もあり、今後の動向が注目される。

## 8. 主な文献

- 清棲幸保(1978) アカショウビン. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I, pp. 435-437. 講談社, 東京.  
美馬秀夫・中村正博・中坂学夫(1988) アカショウビン *Halcyon coromanda* がスズメバチの古巣で繁殖. Strix, 7: 283



静岡県内 1996年6月3日 渡邊修治



静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②) 変更なし

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

### 1. 種の解説

中型の猛禽類で全長オス 38~44 cm、メス 46~51 cm である。翼開長オス 84~104 cm、メス 111~120 cm。性的二型が顕著で、メスの方がかなり大きい。頭部から背面、尾の上面が黒く、下面は白っぽい。胸は白地に細かな縦斑があり腹部には横縞がある。顔にはハヤブサ類特有のほおひげ状の模様がある。幼鳥は全体に褐色味が強く、胸から腹に顕著な縦斑がある。翼は細長く、先が尖っている。開けた場所での狩りを得意とする。留鳥または冬鳥 (対象: 生息地)。

### 2. 分布

国外では南極大陸とニュージーランドなどを除き、ほぼ世界中に分布する。国内では北海道、本州、四国、

九州に周年生息し繁殖する。ほとんどの地域では留鳥だが、冬期には北方から飛来している個体もあり、繁殖していない地域でも越冬個体が観察される。県内では主に冬鳥として全域で観察される。

### 3. 生息環境

海岸や河川などの開放的な環境に生息し、高速で巧みな飛翔や急降下による狩りで鳥類を捕食する。飛翔能力が高く、広範囲を移動するので山間地にも出現することもある。県内でも繁殖が確認されたが、繁殖地では高い崖の岩棚や穴を使用して営巣する。

### 4. 生息状況

最近是一年を通して見られる地域や、伊豆の一部で繁殖が確認されている地域がある。数はごく少ないものの、繁殖例は定常化しつつある。冬の間は、市街地のビルに居着き、ドバトなどを餌としている個体も見られる。市街地や平野部に近い里山、山地に生息するが、海岸近くや平野部の河川、遊水地、緑地などの広い開放的な場所で観察されることが多い。

### 5. 減少の主要因と脅威

本種は、1950~1970年代に有機塩素系農薬 (32) により世界的に激減した。日本においても同様な原因が考えられている。1990年代以降は復活傾向にある。本県では、海岸線や河川の崖などの営巣適地は少なく、狩りに適した開放的で捕食対象の鳥が多い場所も開発 (13、14) やレジャー (71) などにより少なくなっている。

### 6. 保護対策

県内において海岸線や河川の崖などの営巣適地は限られており、保全する必要がある。

### 7. 特記事項

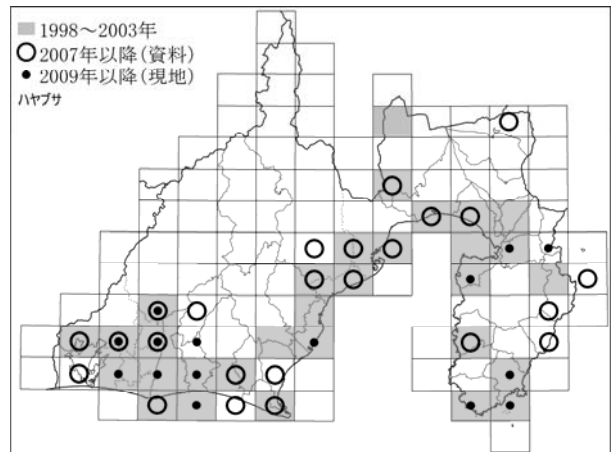
種の保存法に基づく国内希少野生動植物種 (平成5年)。

### 8. 主な文献

北沢善政 (1996) ハヤブサ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第3巻 鳥類Ⅱ, p. 175. 平凡社, 東京.



©2019 K.Kitagawa  
天竜川 2008年2月12日 北川捷康



(新井 真・近藤多美子)

### 1. 種の解説

全長約 19 cm。体上面は藍黒色で、眼の上から後頸部の一部と腰及び下尾筒は橙褐色。頬、喉、腹部は白褐色で黒褐色の細い縦斑がある。雌雄同色。尾羽は一番外側が他より長い燕尾形。ツバメより大きく、ツバメ類の中では腰が橙褐色で胸から腹に細い縦斑点があるので識別は容易である。ツバメより遅い4月中～下旬頃に渡来し、10月中・下旬頃に渡去する。餌はカやハエ類、カメムシ類、ユスリカ類などの小型昆虫類である。夏鳥（対象：繁殖地）。

### 2. 分布

国外ではロシアウスリー地方、韓国、中国から小アジアまでとバルカン半島、アフリカ中部で繁殖する。国内では北海道から九州まで夏鳥として渡来し繁殖する。県内では主に標高の低い市街地や農村部に分布する。

### 3. 生息環境

市街地、村落、池、河川、河口付近に生息する。飛翔する小型昆虫類を飛びながら捕食するので、これらの昆虫類の多い地域に生息し、コンクリートやモルタルなどの建造物に、泥と糞に唾液を混ぜ合わせて徳利を縦に割って天井に張り付けた形の巣を造る。

### 4. 生息状況

県内の平地の広い範囲で繁殖し、もともと集団でコロニーを形成し毎年同じコロニーを利用する習性があった。しかし、前年使用した巣が、留鳥のスズメやヒメアマツバメに奪われるケースが増え、県内最大の JR 菊川駅にあるコロニー（50 巣ほど）も 25 年以上前に消滅した。各地でコロニーの消滅が目立ち、10 巣を超えるコロニーはほとんどなくなった。川幅 10～20 m ほどの川に架かる橋の裏側に数巣のコロニーを形成するケースもある。筆者の秋の渡り時の調査では、1960 年代には旧天竜市街の二俣川双竜橋付近の電線にびっしりと並んで止まる 600～1,000 羽ほどの集団が見られた。現在は、川や湿地で餌の補給ができる場所に数十羽の群れが見られる程度になった。

### 5. 減少の主要因と脅威

スズメやヒメアマツバメなど他の種に巣を奪われ（56-2）、巣材の泥が付着しにくい営巣場所の新建材（71）に苦勞して造り直しても、カラスに繁殖中の巣を壊されて卵やヒナを捕食される（52-4）、という状況が減少の主要因である。なぜスズメが本種の巣を奪うようになったのか。かつて私たちの住んでいた和風の家は軒端を含めて隙間が多くそれらをスズメが巣に利用していたが、洋風の新建材を用いた建物には巣に利用すべき隙間がなくなったことが原因である。それらに加えて、ツバメ類を益鳥として保護しようという意識が薄れたようで、家が汚れた、糞が汚いと人によって巣が壊される事態（71）まで生じるようになった。

### 6. 保護対策

人為的な巣の破壊については、本種の置かれた状況の啓発が必要であろう。

### 7. 特記事項

特になし。

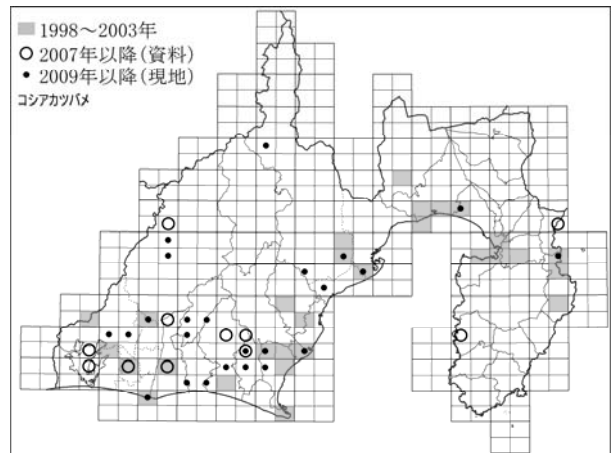
### 8. 主な文献

高野伸二 編（1985）ロシアカツバメ．山溪カラー名鑑 日本の野鳥，山と溪谷社，東京，：390

（北川捷康）



©2019 H.Nakamura  
浜松市中区上島 1987年11月15日 中村裕志



# イイジマムシクイ *Phylloscopus ijimae* (Stejneger, 1892)

ムシクイ科 Phylloscopidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) (要件-②)変更コード7

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ]

## 1. 種の解説

全長約 11.5 cm。雌雄同色。本種はセンダイムシクイに極似しており、上面は淡いオリーブ緑色で下面は淡い黄白色、眉斑は細い。両者の違いは、本種には頭中央線がなく、また、目の下側の黄白色が目立つ場合が多い。さえずりは他と全く異なるため、春の渡りの時には、鳴き声で本種と確認できる。本県には、伊豆諸島で繁殖した個体が旅鳥として春秋に通過する。旅鳥(対象:生息地)。

## 2. 分布

本種は世界で伊豆諸島の大島から青ヶ島までとトカラ列島の中の島にのみ、夏鳥として渡来、繁殖する。本種が最も多く生息するのは、伊豆諸島の三宅島である。県内では春に遠州灘沿岸の照葉樹林を通過する個体が観察される。秋季の記録は、天竜川河口付近の河畔林の標識調査と南伊豆町のわずかな観察記録のみである。

越冬地はフィリピンなど東南アジアと思われるが、もともと生息数も少なく観察による識別も困難なことから詳細は不明である。

## 3. 生息環境

繁殖地の伊豆諸島は、スダジイやタブノキが優占する常緑広葉樹林で生息密度が高く、落葉広葉樹の二次林にも生息する。本県では渡り中継地として、広葉樹林、平地の照葉樹が茂る公園、河畔林などで観察されている。

## 4. 生息状況

本県では、3月末から4月にかけて、山地の自然林や照葉樹が茂る公園、ヤナギを主とした河畔林でさえずりや標識調査により確認されている。センダイムシクイより渡りの期間が早く、4月下旬にはほぼ渡り終わるが、天竜川河口で5月2日の標識記録(北川, 2007)もある。南伊豆町では、2016年に18羽が確認されている(渡部良樹氏私信)。

一方、秋季は8月下旬から9月にかけて本県を通過しているものと思われるが、近年の確実な記録は、天竜川河口付近のヤナギ林で標識調査による数例があるのみである。和歌山県や愛媛県の標識調査から、秋季は主として山地帯を通過して越冬地に渡っているようである。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な繁殖地の三宅島では、地上付近に営巣する本種がネズミ駆除のために放獣されたイタチの捕食(52-3)により個体数を減少させていることが懸念される。また、渡来地・越冬地の環境悪化(54)も懸念される。なお、三宅島の噴火を原因とした生息数の減少は、火山活動の鎮静化とともに植生が回復し、その影響は徐々に収まってきているものと推測する。

## 6. 保護対策

特になし。

## 7. 特記事項

文化財保護法に基づく国の天然記念物(昭和50年)。

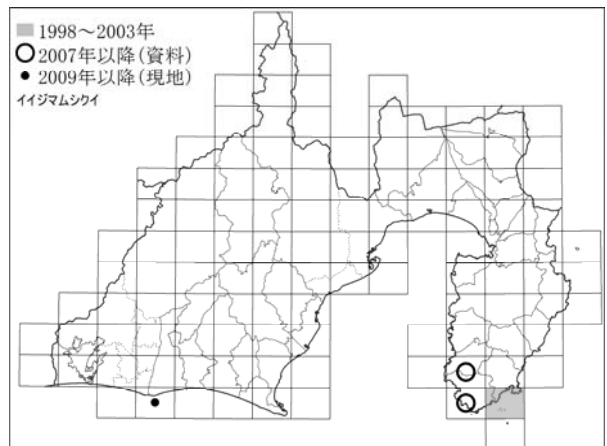
## 8. 主な文献

樋口広芳(1973)伊豆諸島の鳥類(Ⅱ)イイジマムシクイの伊豆半島通過例と伊豆諸島における越冬例。鳥, 22: 24-25

北川捷康(2007)2006年天竜川河口鳥類の渡り調査報告ー渡りルート上への巨大風車群増設計画の問題点を踏まえてー。遠州の自然, 31: 6



天竜川河口(標識調査) 2014年4月13日 川合正晃



(川合正晃)

# ウチヤマセンニュウ *Locustella pleskei* Taczanowski, 1890

センニュウ科 Locustellidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類(VU) (要件-②)変更コード7

[2004年版カテゴリー 情報不足 (DD) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類 (EN) ]

## 1. 種の解説

全長 16.5 cm。雌雄同色。羽色は全身灰褐色。近縁のシマセンニュウと比較すると全体にやや大きく、嘴、足ともにやや長い。羽色は黒味が強い。広げた尾羽はセンニュウ類の特徴である扇状を呈するが、シマセンニュウに比べ丸みが緩やかで汚白斑はやや小さい。旅鳥(対象: 生息地)。

## 2. 分布

国外では朝鮮半島周辺、国内では九州近海、紀伊半島周辺のいくつかの小島、伊豆七島の三宅島を中心とした島嶼に夏鳥として渡来、繁殖する。非繁殖期は、中国南部、インドシナ半島に渡り越冬する。県内では伊豆諸島で繁殖する個体が春秋に旅鳥として通過する。

## 3. 生息環境

繁殖地では、笹藪、ススキ原、海岸付近の矮性照葉樹林に生息する。一方、県内では、近年、天竜川河口のヨシ原が、渡りの中継地として定期的にご利用されていることが標識調査により確認されている。

## 4. 生息状況

1990年代に天竜川河口における標識調査により、8月下旬から9月にかけて数例の生息が確認された(武田由紀夫氏私信)。その後筆者の2011年から2017年の継続調査により、8月上・中旬に毎年複数個体(最多11個体)が標識され、伊豆諸島で繁殖した個体が秋の渡りの時期に定期的に本県を通過していることが明らかとなった。

## 5. 減少の主要因と脅威

主な繁殖地の三宅島では、地上付近に営巣する本種がネズミ駆除のために放獣されたイタチの捕食(52-3)により個体数を減少させていることが懸念される。また、渡来地・越冬地の環境悪化(54)も懸念される。なお、三宅島の噴火を原因とした生息数の減少は、火山活動の鎮静化とともに植生が回復し、その影響は徐々に収まってきているものと推測する。

## 6. 保護対策

本種が渡りの時に利用する、河口や沿岸付近のヨシ原を保全する必要がある。

## 7. 特記事項

特になし。

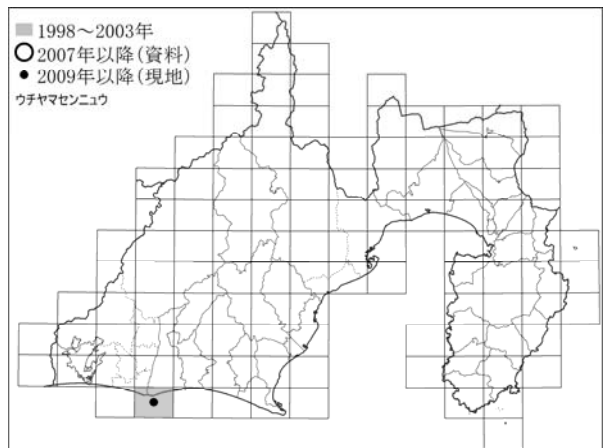
## 8. 主な文献

永田尚志(2008)ウチヤマセンニュウ. バードリサーチニュース, 5(5): 2-3

川合正晃(2012)ウチヤマセンニュウの渡り-2012年春秋の天竜川河口の状況より-. ALURA, 45: 14-16



天竜川河口(標識調査) 2017年7月30日 川合正晃



(川合正晃)



### 1. 種の解説

全長約 23 cm。オスは全身が黒色で、眉斑が白い。メスは頭上から上面がオリーブ褐色で、顔、胸、脇の羽毛は白く先端が褐色なので白と褐色の斑模様になっている。繁殖期にはあたりが薄暗くなったころによく鳴き、「チョロン・チー」と聞こえる、あまり大きくなく澄んだ声でさえずる。メスも同様にさえずる。さえずる朝の時間帯は日の出前から鳴き出し、日の出後 30 分ほどで鳴き止む。昆虫類と植物の実を主に食するが、富士山麓の育雛期にはミヤマザクラの漿果をヒナに給餌するものが多い、という調査結果がある。夏鳥（対象：繁殖地）。

### 2. 分布

国外ではシベリアの中部、東部の温帯から亜寒帯にかけて繁殖し、冬期は東南アジアの中国南部、ミャンマー、マレー半島、スマトラなどに分布する。国内では北海道と本州で繁殖する。県内では西部・中部・富士山・伊豆に、個体数は少ないが分布している。

### 3. 生息環境

標高 1,000 m 未満からさらに高い範囲のブナやミズナラを主にした落葉広葉樹林に生息し、亜高山帯では針葉樹林に生息する。

### 4. 生息状況

西部では蕎麦粒山、水窪野鳥の森など、中部では安倍峠、井川県民の森など、富士山では浅黄塚、十里木、太郎坊など、伊豆では西天城、万三郎岳などに生息する。かつて標高 1,000 m 付近の門桁山周辺では夕刻に降るようなさえずりが聞かれたが、現在では西部及び伊豆で個体数が激減している。中部の詳細は不明、富士山は安定しているようである。

### 5. 減少の主要因と脅威

越冬地域での大規模な森林伐採の影響が考えられる (11) が、はっきりした要因は不明 (99) である。

### 6. 保護対策

特になし。

### 7. 特記事項

本種の越冬地の解明を目的として、2010 年 6～8 月に富士山において 15 個体にジオロケータを装着した調査が行われた。2011 年 6 月以降に 2 個を回収し、そのうちの 1 羽は 11 月中旬から 2 月下旬まで、カンボジア南西部を中心とするインドシナ半島南部に滞在しており、越冬したと考えられている。

### 8. 主な文献

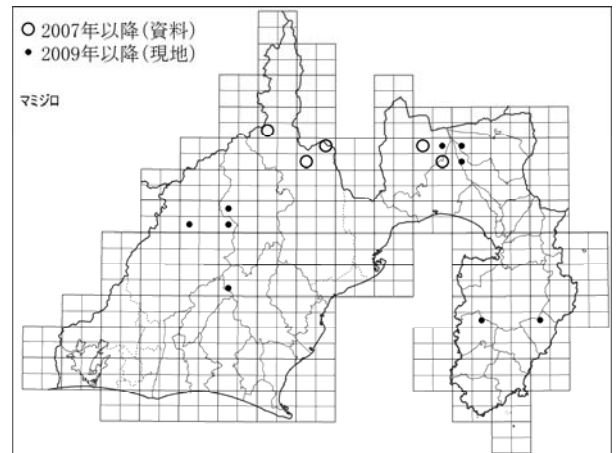
清棲幸保 (1978) マミジロ. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑 I, 講談社, 東京. : 207-209

高野伸二編 (1985) マミジロ. 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, 山と溪谷社, 東京. : 443

仲村昇ほか (2011) ジオロケータを用いたブッポウソウとマミジロの渡り追跡. 2011 年度大会講演要旨集, 日本鳥学会, 東京. : 110



左：オス 裾野市 2011年6月8日 渡邊修治  
右：メス 富士宮市 2013年5月14日 渡邊修治



(北川捷康)